

お針子の生と死

——「シャツの歌」から『ルース』へ

松 村 昌 家

(1) ロンドンの「白人奴隷」

表題に掲げた「シャツの歌」は、1843年12月、『パンチ』のクリスマス号に掲載された。作者はトマス・フッド（1799-1845）。あとから述べるように、二人の幼児を抱えて苛酷な針仕事でこき使われる、ビデルという名の女の身の上に同情して書かれた詩である。

エリザベス・ギャスケルの『ルース』（1853）は、当時におけるお針子たちの仕事がいかに苛酷であったかを描き、お針子あがりの女性を主人公として成り立った小説として知られている。

「シャツの歌」から『ルース』までは、ちょうど十年の開きがあるが、その間にお針子の問題がしばしばジャーナリズムに取りあげられると同時に、それをテーマにした文学作品も数多くあらわれた。お針子の境遇と、「大きな社会悪」（the great social evil）と烙印を押された「堕ちた女」とが常に隣り合わせになっていたという現実がクローズアップされるにつれて、その問題に対する社会的関心が高まったからである。

ギャスケルが作家としての出発当初からお針子と堕ちた女に深い関心をもって来たことは、『メアリー・バートン』（1848）や短篇『リジー・リー』（1850）にあらわれているとおりである。ギャスケルがヴィクトリア朝における社会小説の一チャンピオンであったことを思えば、『ルース』は当然書かれるべくして書かれた小説であったといえよう。「シャツの歌」から『ルース』に至るまでの道すじを、「お針子の生と死」の諸相を通して描き出してみたいと思うゆえんである。

イギリスでお針子の境遇が社会的な関心事となったのは、いつの頃だろうか。『ルース』の時代的背景を想定する上での手がかりにもなることなので、まずこ

の問題から話をはじめることにして。

1832年、ロンドンとマンチェスターに、それぞれモーゼズ父子商会と、ハイアム兄弟商会が誕生した。ともに既製服仕立業者で、古着に代えて廉価の衣服を量産しようというのが、彼らのそもそもの狙いであった。この仕立業の産業化が進むなかで、裁縫労働の需要は急激に高まったのだが、業者たちは量産とともに高率の利益を貪るのにきゅうきゅうとして、惨めな裁縫労働者たちの生活保証は、顧ようとしなかった。殊にロンドンを基盤としたモーゼズ父子商会のあくどさには眼に余るものがあり、しばしば『パンチ』の攻撃材料となった。

「飢餓の四十年代」に入ってから、事態はますます悪化。1843年10月25日に、お針子問題の発端ともいべき一つの事件が発生した。

二人の幼児を抱えたビデル（この女には、クリスチャン・ネームさえなかった）というお針子が、困窮の果てにモーゼズ商会から委託されていた仕立地を質に入れてパン代に替えてしまった。その罪で彼女は裁判にかけられ、事情を聴取した治安判事は、彼女を矯正院（刑務所の一種）に送り込むにしのびず、ひとまず救貧院に収容することでけりをつけた。

翌二十六日、『タイムズ』はこの出来事を詳細に報じるとともに、翌二十七日には長い論説を掲げて、スロップ・トレード、すなわち既製服仕立業者の苛酷な搾取に対する非難キャンペーンを展開させた⁽¹⁾。その中から当面の問題と特に関係の深いところを、二、三拾い出しておくことにしよう。

モーゼズ商会からビデルに支払われる賃金は、ズボン一着につき七ペンス。その割合で仮に七シリングの週給を得るためには、九十六時間の労働を必要とする。月曜日から土曜日までだったら毎日十六時間、日曜日を含めると、一日十四時間働かなければならない。まさに「^{スウェアト・アンド・レイバー}苦汗労働」⁽²⁾にほかならないのである。

『タイムズ』の論説は、お針子たちに向けられた「このような冷遇に対しては、きっと思い知られるときがくるはずだ」という一文をもって終わっているが、その言葉の響きには、「イギリスの状況」を論ずるときのカーライルの論調を感じさせるものがある。それほどに、『タイムズ』は、お針子の状況を深刻にとらえているのである。同じ『タイムズ』に載った「ロンドンの白人奴隷」という見出しのついた記事は、おそらくこの深刻さをより現実的に強調するために書かれたものであろう。右に述べたようなお針子の境遇は、「いかなる道徳的観点から

見ても、西インド諸島で冷酷な親方のもとで酷使される黒人奴隷と、なんら変わるところがない」ことが、実態調査の結果に基づいて指摘されているのである。

この場合に『タイムズ』が攻撃の標的にしているのは、もちろん^{スロウ・セラーズ}仕立業者であり、あくどい仲介業者であるが、中に「破廉恥にも義務感を忘れ去った金持連中」という言葉が含まれているのを見逃すわけにはいかない。お針子たちは労働の場においてのみならず、セクシュアリティの面で「白人奴隷」をもって喩え得る存在であったからである。あとから述べる『若い帽子づくりの女』におけるゴッドフリーとベッシー・ランバート、『ルース』におけるベリンガムとルースとの関係を通じて、明らかになる問題である。

先の『タイムズ』の論説に対していち早く、かつ積極的な反応を示したのは、『パンチ』であった。『パンチ』は1843年11月4日号に「飢餓とファッション」という題のもと、『タイムズ』の論説の一部を引用するとともに、モーゼズ商会に対して特有の辛辣な皮肉を浴びせた。

ビデルの裁判に際して証人として出廷したモーゼズ商会の現場主任は、セシリングあれば彼女が二人の幼児とともに「楽に生活できる」と言ったが、『パンチ』はこの妄言をまず槍玉にあげ、ついで「モーゼズ商会」という題の風刺詩を載せた。

ま新しい衣服がほしけりゃ、
モーゼズの店へ急いで行くがよい、
飢餓のやつれた手できれいに縫われた
ホランド服が二、三歳用から並んでいる。

という詩行にはじまって、

お子様用の刺繍入りチュニックをつくり――
モールを編んだ眼も今は視力なく、
この店に並ぶ豪華なビロードのヴェストには、
どれにも憐れな寡婦の涙の粒が光り、
娘や妻のために仕立てられた乗馬服は、

いずれも安い——そう、ご婦人方、貧乏人の命同様に安い。

という風に、二行ごとに「飢餓とファッション」の組み合わせのアイロニーがうたわれているのである。

(2) 仕事場のお針子

「シャツの歌」が書かれた背景には、以上のような経緯があった。

『パンチ』の編集長マーク・レモンは、編集仲間の反対を押しきってこの詩を採用し、1843年12月16日号の誌上に掲載した。おかげで『パンチ』の売れ行きは一挙に三倍も上昇し、トマス・フッドは一躍にして詩人としての名声を獲得した。「シャツの歌」は、『タイムズ』はじめ多くの新聞に転載されたほか、ヨーロッパ諸国語に翻訳され、ブロードサイドに印刷され、舞台や街頭で歌われるなど、大喝采をもって迎えられた。そしてさらには、当時ジェントルマンのあいだで流行していたコットンのハンカチーフにもこの歌がプリントされるという、皮肉な現象まで生じていたということである⁽³⁾。

『パンチ』に発表された「シャツの歌」は、全十一連から成るが、そのうち最初の二連を紹介しよう。

疲れきって荒れた指先で、
寝不足の赤いまぶたの
一人の女が坐り、女らしくないボロの身なりで、
せっせと針を動かし針仕事——
ひと針！ ふた針！ またひと針！
貧乏と飢えとよごれのなかで、
いつも哀しい調子の歌ごえで
女は歌った「シャツの歌」を！

「働いて——働いて——働いて！
遠くで雄鶏が鳴くときも、

働いて——働いて——働いて——、
星の光が破れた屋根から見えるまで！
これがキリスト教徒の仕事なら、
女の魂が救われようのない、
野蛮な異教徒のそばにいて、
ああ、奴隷になるのと同じこと！」

「シャツの歌」は、少なくとも今日知られているものとしては、お針子を主題とした文学作品第一号なのだが、以上の二連だけを対象として判断したとしても、これが『タイムズ』に取り上げられたビデル事件によってインスパイアされてきた作品であることは疑う余地がない。

そしてまた、全体にわたって検討を加えるならば、「シャツの歌」と『ルース』第一章に描かれている針仕事の情景との間には、予想以上の類似性があることも感じとれるであろう。まずは夜を徹しての辛い針仕事の連続。「シャツの歌」のお針子が、「遠くで雄鶏が鳴く」まで「働いて、働いて」働きつづけるのに対して、ミセス・メイスンの助手として針仕事をはじめた「ルース・ヒルトンは、（中略）疲れきった体である一月の夜をすごした。夜と言ったが、厳密に言えば朝方になっていた。午前二時を知らせるセント・セーヴィア教会の古い鐘の音が聞こえて」くるまで、彼女は働きつづけるのである。（第一章）

そんななかで、ルースは気の赴くままに外にとび出し、広々とした外の空気を吸うことができていた過ぎし日を思っ涙ぐむ。このようなルースの心情の動きに対しては、「シャツの歌」第九連——「ああ！ あの高い空の下で／青草を踏みしめながら、／カウスリップや、さくら草の甘い香りを／ほんの一息吸えたなら——……」という慨きを対応させることができるであろう。

以上あげたような類似性は、もちろん影響関係という観点からとらえることも可能であろう。けれども私は、それよりも両者間の類似性は、描かれているお針子についての真実性を、その分だけ強めているのだという点を重視したい。つまりフッドとギaskellが、それぞれの作品に映し出した情景は、その類似性によって、仕事場におけるお針子の苦汗労働に関する、文学者側からの強力な証言としての意味をもち得るのである。

「シャツの歌」に引きつづき、フッドは「嘆きの橋」(The Bridge of Sighs)を、1844年5月に、彼自身が創刊した「フッズ・マガジン」(Hood's Magazine)に発表し、これもまた大きな反響を呼んだ。冒頭に、

不幸な女がまた一人、
人生に疲れはて、
思慮のいとまもあらばこそ、
死への道をえらんだのだ！

とあるように、この詩は入水自殺を遂げた「不幸な女」を憐れんでつくられたものだが、その背景には、「シャツの歌」の場合と同じように、お針子に関わる事件が絡んでいた。その悲惨さからいっても、波紋の広がりからいっても、また文学作品との関係からいっても、この事件は、先のビデルのケースをはるかに上回るものがあった。要点を簡単にまとめておこう。

二人の私生児を抱えたメアリー・ファーレーという名のお針子が、やっとのことで手に入れたなげなしの金を盗まれて生きる望みを失い、子どもたちを道づれに入水自殺を図った。女は救助されたが、子どもたちは死亡。故意の幼児殺害の罪で彼女は裁判にかけられ、即死刑の判決を言い渡された。

この判決がくだされたのは、1844年3月25日。このときも『タイムズ』が、この憐れな女の救済のために起ち上がり、3月26日から5月15日に至るまで前後九回にわたってメアリー・ファーレー弁護のための記事を載せて、死刑判決取り消しのキャンペーンをくり広げた。結果として死刑執行は延期され、最終的には七年間の流刑が言い渡されて、この事件は落着いたが、その間に「嘆きの橋」の創作につながる出来事が起こったのであった⁽⁴⁾。

メアリー・ファーレーに関わる問題が、このように推移するあいだ、トマス・フッドは病床にあって、創刊されたばかりの『フッズ・マガジン』の経営が危ぶまれる状態であった。そこで多くの文学者仲間が無報酬で原稿を送って、その窮状を助ける運動が広がった。率先してその運動に加わったディケンズは、「チャールズ・ディケンズの支援を得て一老紳士よりトマス・フッドに宛てた脅迫書簡」と題する原稿を、フッドのために草することになる。一見ものものしい表題だが、

時代や政治の墮落を慨くなかで、メアリー・ファーレーを裁いた判事を痛烈に風刺することを最大の狙いとして書かれた文章にほかならないのである。参考までに、その一部分を訳出しておくことにしよう。

〔そのモールという名の〕判事は、先日革命的不逞分子ともいうべき女を裁いた。その女は、(一枚につき三ペンス半の賃金でシャツを縫いながら)力いっばいの仕事をしていたにもかかわらず、祖国に誇りをもたず、楽々と稼いだ金を盗まれて狂乱状態となり、幼児を道づれに入水自殺を図った。由々しき反逆行為である。そこでかの名誉ある判事は、異常の手段により、——異常の、ですよ——彼女を召喚して死刑を即決、この世での慈悲を望むのは無駄である旨を言い渡した——詳細については、4月17日水曜日の新聞をご覧ください。

フッドがこの「脅迫書簡」を読んで、初めてメアリー・ファーレーの事件を知ったかどうかはとも角として、これによって詩心を刺激されて、一気に呵成に「嘆きの橋」を書いたということは、アルヴィン・ウィトリーも指摘するとおりである。そして「嘆きの橋」と「脅迫書簡」とが同時に、『フッズ・マガジン』五月号に掲載されることになるのである。

フッドがメアリー・ファーレーに関わる「事実」をどのように虚構化しているかについては、いくつかの興味深い問題があるが、ここではお針子のテーマに即して、一つのことだけをあげておくことにする。それは、実際にはファーレーが二人の私生児をつれた四十歳の中年女性であったのを、フッドは独身の若い女性に仕立て、しかも「蔑みの手で触れるのをやめよ、」とか、「彼女の身の汚れ」などの詩行によって、墮ちた女の入水自殺のイメージをつくり出している、ということである。

この路線でもう一つつけ加えておきたいのは、ディケンズがファーレーの事件に基づいて、例の「脅迫書簡」を書いたばかりでなく、この事件を『鐘の音』に利用しているということだ。

『鐘の音』その三に、^{ディケンズとポーラー}公認配達屋トビー・ヴェックの夢幻を通じて、彼の娘メグと、彼女と親しくなった少女リリアンとが、お針子として希望のない針仕事に

明け暮れる光景が描き出されている。そのうちにリリアンは金を稼ぐために街の女に転落、最後には赤ん坊を抱いたメグが、下宿に入れてもらえず、絶望してテムズ河を目ざして走って行くシーンが展開する。「嘆きの橋」冒頭に「不幸な女がまた一人、／人生に疲れはて、／自暴の念にとりつかれ、／死への道をえらんだのだ！」とうたわれているのを思い出させる情景である。

(3) 『ルース』との関連

オックスフォード大学出版局のワールズ・クラシックス版『ルース』の注解は、第二十一章に描かれている選挙運動の模様や、第二十三章に言及されている鉄道の旅などを根拠に、この作品の時代的背景を大体 1830 年代後半と推定している。

しかし、少なくともルースの物語の発端は、以上述べてきたような「シャツの歌」や「嘆きの橋」が出てきた時代的、社会的条件と切り離すことはできない。1843 年から 1844 年にかけて、お針子のテーマが、一つの文学的トポスを形成していたことを示すために、ここでもう一つエリザベス・ストーンという女性作家によって、『若い帽子づくりの女』(*The Young Milliner*) という作品が書かれていた、という事実を目を向けておこう。トマス・フッドの「シャツの歌」と同じく、1843 年の作であるが、ストーンは、これより先に『針仕事の技術』(1841) を書いているところから見て、お針子に対する関心においても、また作品の発表においても、フッドより一歩先んじていたと判断してよからう。

『若い帽子づくりの女』は、マイケル・サドラーの『十九世紀小説』の文献目録にも、ジョン・サザランドの『ヴィクトリア朝小説の伴』にもその名があがっていないところからみて、もはや完全に忘れ去られた小説と見なしてよさそうだ。しかしお針子をテーマにする限りそれなりの重要性をもち、『ルース』の先がけをなすようなところもまま見られて、興味深いのである。とりわけヒロインとして、エレン・カータンという名の若くて美しい孤児が登場し、ファッション服仕立業のマダム・ミノーの見習いとなって働くうちに、金持ちのジェントルマン、ゴッドフリーにねらわれるところとなるという筋書きは、私たちの注意をひきつける。ルースとベリンガムとの関係と一脈相通ずるところがあるように思えるからである。

それからさらに、若いお針子たちが文字どおり奴隷さながらに働かされている仕事場と、そこでつくられた服で着飾る上流紳士・淑女との織りなすコントラストもまた興味深い。そして、ヒロイン、エレンの身代わりの形で、ゴッドフリーの餌食となって墮ち果てるお針子ベッシー・ランバートの悲惨な人生——これもまた、一つの先駆的な事例として数えあげることができるのである。

白人奴隷に喩えられるほどのお針子たちの生活苦を考えた場合に、彼女らが富の誘惑に陥りやすかった事情も十分に理解できるであろう。誘惑され、そして捨てられるという展開が、お針子をヒロインとした小説のおきまりのパターンとなったのも、当然の成り行きだったといえよう。

すでに述べたような連日連夜の仕事で疲労困憊の末に、惨めさをいやというほど自覚していたルースにとって、彼女に好意を示してくれたヘンリー・ベリングラムは、まさに輝かしい陽光のような存在であったに違いない。そしてルースを一目見てその美しさにひかれ、「誰かがテーブルの上に残してあった椿の花を手にとって」彼女に渡したとき（第二章）、彼女に対するベリングラムの誘惑は、事実上はじまっていたのである。

そして彼らが二度目に出会ったとき、ベリングラムが溺れかけた村の少年を救出し、財布をまるごとルースに預けてその世話を委頼するのは、その意味で特に重要である。先ほど紹介したエリザベス・ストーン『若い帽子づくりの女』にも、似たような場面が設けられているだけに、この状況設定は興味深く感じられるのである。『若い帽子づくりの女』のヒロイン、エレンは、ゴッドフリーから差し出された絹の財布を「テーブルに投げつけて部屋からとび出し、家の外へとび出した。」（第五章）これによって彼女がゴッドフリーの毒手にかかる運命から免れることが予告されているとするならば、ベリングラムから渡された財布を、かりそめにも受けるとするルースの行為にも、彼女の運命が予告されていると、読みとることが可能である。

とはいっても、ゴッドフリーの誘惑のあり方とベリングラムのそれとを同一視するつもりはない。ゴッドフリーが大金持の仮面紳士であったのに対して、ベリングラムは、あらゆる意味において正真正銘のジェントルマンであった。にもかかわらず、彼とルースとの関係が結婚という形で成立せず、結局は性的関係で終わってしまうのは、まさに彼がジェントルマン階級の間人だったからにほかならない

のである。

舞踏会におけるベリンガムのパートナーとしてのダンコム嬢とルースとの対比（第二章）、彼の母親の人を人と思わぬ驕傲に対する彼の抵抗感（第三章）などを通じてあらわされているように、ベリンガムは、ジェントルマン階級の世界では望むべくもない清純な美しさをルースに見出して、心ひかれたのであった。

一人前の女としての優しさと愛らしさが、聡明な子どもの純真素朴さ、清純さと融け合っているところに、何か魅力的なものがあつた。彼女を賞賛する気持ちから親しく近づこうとする人びとを、なんとか避けようとする恥らしい態度にも、魅力がそなわっていた（第三章）。

しかし、ルースに対するベリンガムの関心は、そういう内気で清純無垢な若い女をひきつけて、「あたかも彼が母親のパークで臆病な子鹿を誘い寄せて手ならしたのと同じように」（第三章）、彼女を自分のものにするという欲望を超えるものではなかつた。

お針子ルースに対するベリンガムの憧れが、このようにジェントルマンとしての地位の優位意識と不可分のものであつた以上、ルースの「墮ちた女」になる運命は、すでに定まつたようなものである。まずはベリンガムとの交際が発覚したためにルースは、ミセス・メイスンから追放を言い渡されて、ベリンガムの誘いに応じる以外に選択の余地がなくなる。そして北ウェールズの宿でのしばらくの間の同棲。

風光明媚のこの土地でルースは自然の美しさに感応しながら、お針子としての生活の中で渴望してやまなかつた「新鮮な空気」を存分に味わうのだったが、もちろんそれが長くつづくはずはない。同じ宿に泊まっていた子どもづれの母親の「あんなふしだらなことが、同じ屋根の下で行われているんで」（第六章）という言葉は、少なくとも対面を重んじる世間の眼は、すでにルースに墮ちた女の烙印を押ししていたことを物語る。

そしてまもなく彼女は未知の土地に置き去りにされて絶望的になり自殺しようと山あいの急流を目ざして突っ走る、というドラマの展開も、ほぼコンヴェンションどおりのパターンだといえよう。

しかしギヤスケルは、それに伴って、墮ちた女のコンヴェンションには例のない出来事を設定していることを見落としてはならない。すなわち、北ウェールズの宿で、ベリンガムが重病に倒れ、ルースは献身的な看病によって、彼の生命を救っているということである。のちにもルースは、文字どおり自己を犠牲にして、ベリンガムを看病し、彼の命の恩人となるのであるが、ルースのこの献身ぶりには、ディケンズの『共通の友』(1864-65)に描かれたリジー・ヘクサムとユージン・レイバンとの関係を思わせるものがあるがゆえに、興味をひかれるのである。

リジーは、お針子よりもさらに身分の賤しいテムズ河の川浚い女である。いわば好奇心半分に関心を寄せるユージン・レイバンは、法廷弁護士資格をもつジェントルマンだ。両者の間に、誘惑と放棄のパターンが成立しても決しておかしくない状況が設定されるのだが、ディケンズはリジーをユージンの生命の恩人に仕立てることによって、彼ら^{リジー}間の結婚を正式に成り立たせているのである。

ベリンガムの再出現と、その後の物語の展開を通じて、ルースと彼との結婚の可能性を垣間見た読者や、それを期待した読者は、少なくなかったはずだ。しかしギヤスケルが、そのような方向へ物語を発展させなかったのはほかでもない、誘惑者としてのベリンガムの素顔を描くほうに、彼女の関心は傾いたからだったと、私は思うのである。

(4) 誘惑者の再出現

北ウェールズで自殺の瀬戸際で非国教会牧師のサーストン・ベンソンに救われたルースは、その後九年ぶりにミスター・ダンという名で国会議員選挙に出馬しようとしているベリンガムと再びめぐり会うことになる。この成り行きはきわめて異例のことである。なぜならば、墮ちた女のテーマは、女を捨てた男が舞台から姿を消すことによって成り立つものだからである。『家庭の天使』(1854-63)で知られるコヴェントリー・パトモア(1823-96)の詩「森番の娘」(1844年版『詩集』)においてさえも、地主の息子は子どものときから仲むつまじかった森番の娘モードに、私生児をはらませたあと、二度と彼女の前に姿を現さない。だから墮ちた女のコンヴェンションから見ると、ベリンガムの再出現は、注目に値するのである。

ルースがベンソンに救われ、未亡人を装うてブラッドショウ家のガヴァネスを勤めていた過去九年間に、ベリンガムは果たして彼女の身の上を一度でも案じたことがあったらうか。目の前の女が果たしてルースなのかどうか判断しかねているベリンガムの心中を描いたギヤスケルの次の文章は、この間に対するすべての答えを与えてくれるであろう。

何年ものあいだで、このとき初めて彼はその後のルースのことについて考えてみた。といっても、もちろんあり得ることとしては、一つしかなかった。だから、彼女の末路を知らずにいたほうがよかったのではないか。知ってしまうと、とても不安な気持ちになったであろうから（第二三章）。

「あり得ることとしては、一つしかなかった」というのは、もちろん、墮ちた女になることにほかならない。当然のこととして、入水自殺のことも含まれると考えるべきであろう。

このような悲惨な末路は、思うに忍びないから、ルースのことをあえて思い出そうとしなかった、というのがベリンガムの弁明なのである。しかし、そのようなエゴイスティックな発想によって、記憶からも遠ざけていたルースをまのあたりにしたベリンガムは、再び彼女に魅せられることになる。そして息子レナードの養育のために、惜しみなく金をつぎこみたいという、気前のよさを見せることによって、彼は復縁を迫るのである。（第二四章）財布をまるごとルースに預ける、物語の発端部を再び思い出させる場面である。

そして予期に反して、ルースが容易に折れそうにないことを知ると、なんと、彼は一変して開き直りとも思えるような言葉を吐くのだ！「きみは、ぼくの掌中に握られてるってことを知らないのかい？」

ベリンガムは、確かに結婚の意志を表明しているのだけれども、その前後における彼の態度は、どの点からみても依然として無力な女に対するジェントルマン、すなわち誘惑者の態度であって、真の意味での求愛者の態度ではない。ルースが二度転落させられる危険を感じとったとしても、無理ではないのである。だから彼女は彼をはねつけるのであるが、もちろんそれで彼女の気持ちがいさぐさ割り切れたわけではない。怨恨と愛情と悔恨と迷いがこもこも絡み合い、渦巻いてい

たことは、十分に想像されることである。そこへ彼女の過去が露見して、ブラッドショウから追放を言い渡されることになる。ルースにとっての最も苛酷な試練のときであって、仮にこのあとに入水自殺の場面が設けられたとしても、コンヴェンショナルな行き方としては、おかしくない筋運びである。

この緊迫した状況のなかで、ルースが看護婦として献身できる職場をもつようになるのは、きわめて重要な意味をもつ。

エクレストンを襲ったチフス（おそらくギヤスケルの念頭には、イギリス全土にひろがった1848年から49年にかけての第二次コレラの猖獗のことがあったであろう）に感染した熱病患者たちの看護につくすことによって、ルースは彼女にふりかかった試練を克服し、迷いをふり払うことができた。まさに「いかなる疑念も、行動によってしか取り除くことができない」（『衣装哲学』第二巻、第九章）というカーライルの哲学が、ぴったり当てはまるような状況である。

そしてその行動が、富や地位、名声、名誉など、いっさいの世俗的な褒賞と関わりなく遂行されるものであるならば、それはまたカーライルのいう「自己放棄」（*Entsagen*）となるであろう。ルースが自分の生命を賭して、瀕死の状況にあったベリンガムの看護に没頭するのは、まさしくこの自己放棄の境地に到達したことを意味する。この意味において、ルースはヴィクトリア朝小説のヒロインとして、まことに稀有な存在だったのである。

しかもルースの看護婦としての行動力は、一年後における「ランプをもつ婦人」——フロレンス・ナイチンゲールの出現の前ぶれをなしているようで、甚だ興味深い。文学における看護婦像の転換期をなしている点でも、『ルース』は注目されるべきだが、ここで私が強調したいのは、ギヤスケルがルースを通して、お針子にはじまった堕ちた女のイメージに変革をもたらしたということである。

ギヤスケルはトマス・フッドの「嘆きの橋」以来の堕ちた女の入水自殺のトポスと決別し、マグダラの MARIA 像を喚起することによって堕ちた女を神聖化する常套手段に訴えることを避けた。そして彼女は、「罪」の子をもつ母親としてスティグマを背負ったままで、逆境に立ち向かうルースの行き方を描くことにより、社会通念に対するまっ向からの大胆な挑戦を試みたのである。物語の最終段階で、「わたしは自分のために怖れたりはいわないわ。かわいいわが子のためにも。」（第三章）と、熱病患者のひしめく病棟での救済活動に乗り出すルースの決然たる

態度には、それこそ「ランプをもつ婦人」の崇高さを感じさせるものがある。ベリンガムに代表されるような金の力と階級意識、ブラッドショウに代表される社会的・宗教的因襲を凌駕する愛と信念の所産としか言いようのない尊厳を、ギャスケルはルースという一人の堕ちた女に付与したのである。

注

- (1) Alvin Whitley, 'Thomas Hood and "The Times,"' *TLS* May 17 1957.
- (2) お針子の苦汗労働については松浦京子「お針子哀史——シームストラスとロンドンの縫製業」(松村昌家他編『英国文化の世紀』第二巻『帝国社会の諸相』研究社出版、1996)に詳しい。
- (3) cf. J. C. Reid, *Thomas Hood*, London: Routledge & Kegan Paul, 1963, p.208.
- (4) Alvin Whitley, *op. cit.*